

企画展「『S字甕』というとても薄い甕が流行っていた件」主な展示品

	1 S字甕 【重要文化財】 朝日遺跡（愛知県清須市・名古屋市西区） 弥生時代終末期 本館蔵 初期のS字甕の完形品。口縁は小さく屈曲し、下段に押引刺突文※（おしびきしとつもん）を巡らせている。体部には荒いハケメが施され、火に掛けられたススが付いている。3世紀前半、S字甕成立期の資料で、この段階にS字甕は伊勢湾沿岸地域に定着した。 ※押引刺突文：土器の表面に工具を押しつけながら引いた文様
	2 住居跡一括出土のS字甕 【重要文化財】 朝日遺跡（愛知県清須市・名古屋市西区） 古墳時代前期 本館蔵 古墳時代前期の住居跡の床面から4点のS字甕がまとめて出土した。大きさ、形ともほぼ同じであり、S字甕の規格性がよく分かる資料である。
	3 S字系^{てあぶりがた}手焙形土器 六大A遺跡（三重県津市） 古墳時代前期 三重県蔵 手焙形土器は、暖を取るための手焙りに形が似た土器で、弥生時代終末期から古墳時代前期の祭祀用土器と考えられている。本例は口縁がS字状の形になっており、同様な手焙形土器は、わずかだが伊勢・大和地域を中心に出土している。
	4 ミニチュア土器 元屋敷遺跡（愛知県一宮市） 古墳時代前期 一宮市博物館蔵 高さ10 cmほどのS字甕を模したミニチュア土器。表面が摩滅しているため、文様は分かりにくい。口縁部の形態から、古墳時代初期のS字甕をモデルとして作られたと考えられる。実用品ではなく、祭祀儀礼に用いられたものであろう。

写真撮影：あいち朝日遺跡ミュージアム